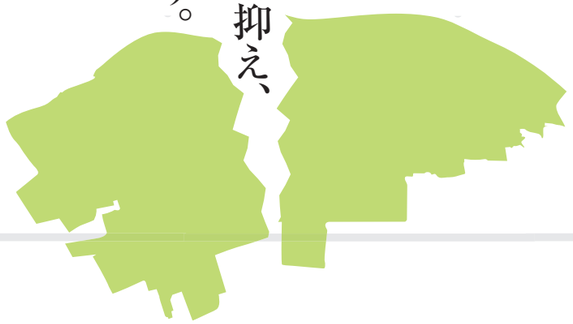
特集

我ら、地域を守る防災士。

本町では本年度、高確率で発生が予測される南海トラフ巨大地震に備え、地域で活躍する防災士の数を大幅に増やし、安全・安心なまちづくりを進めようとしています。そこで今回の特集では、地域を守る防災士を紹介します。

予想される大きな被害―。地域の防災力が被害を抑え、大切な人とまちを救う。



松前町での「南海トラフ巨大地震」最大被害想定

平成25年6月、県公表の「愛媛県地震被害想定調査結果(一次報告)」のうち、各項目での最大被害想定を掲載。想定される震源地、気象条件などは各項目で異なる。

①震度、津波水位　最大4.2mの津波

最大震度	※最大津波水位（メートル）	津波の最短到達時間（分）/最高津波水位
7	4.2	185

※ 津波水位は、海岸線から沖合約 30 メートル地点の津波水位を標高で表示したもの。標高は、東京湾標準海面（海抜 0 メートル）が基準。

②揺れ・液状化の被害　7,550棟全半壊

	揺れ	液状化	合計
全壊（棟）	3,055	357	3,412
半壊（棟）	3,482	656	4,138

③津波の被害　1,834棟全半壊

	木造	非木造	合計
全壊（棟）	61	28	89
半壊（棟）	1,075	670	1,745

④火災の被害　4,719棟焼失

出火件数	焼失棟数	焼失面積
12 件	4,719 棟	200.80ha

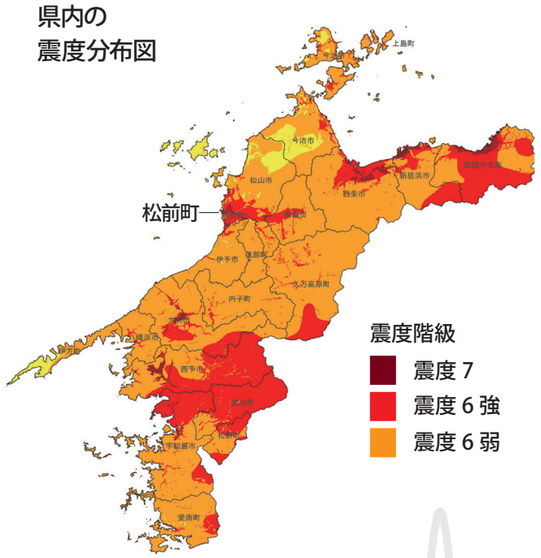
⑤死傷者数　1,751人死傷

建物倒壊	津波	火災	その他	合計
1,412 人	113 人	88 人	138 人	1,751 人

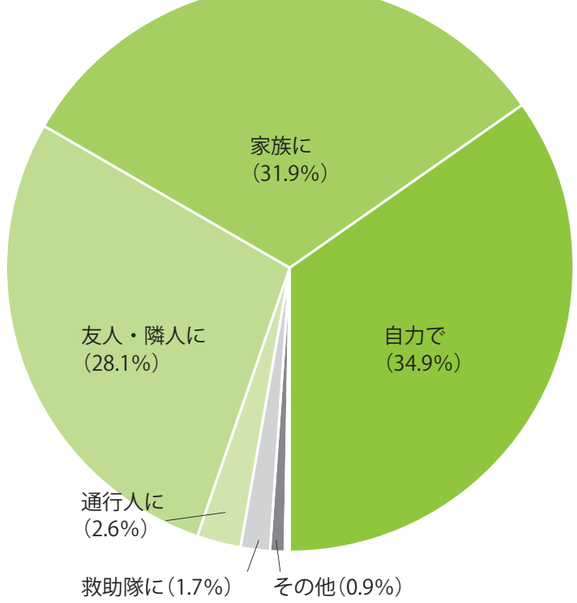
⑥上水道断水、下水道支障の状況　1週間以上断水

	直後	1日後	1週間後
上水道断水	100%	99.8%	98.9%
下水道支障	92.9%	78.5%	28.6%

県内の震度分布図



最大震度7



◀阪神淡路大震災時における生き埋めや閉じ込められた際の救助

（社）日本火災学会「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」より

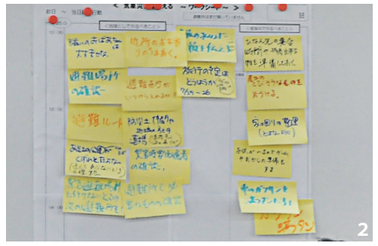
政府機関の地震調査研究推進本部によると、南海トラフ巨大地震が発生する確率は、30年以内に約70%です。高確率で発生することが予測されているこの地震では、本町の被害も甚大になると考えられています（下図）。

被害を抑えるため、個人でも行政でも、事前に家・施設などの整備や物資の準備を行うことが大切であることはもちろんですが、それだけでは不十分です。阪神淡路大震災では、地震が起こり住宅などが倒壊して生き埋めになったり閉じ込められたりしたとき、6割以上が家族や近所の人など周りの人の助けによって救助されています（左上のグラフ）。

大規模災害の発生時、行政などの「公助」が、全ての現場へ速やかに到着することは難しい状況にあります。そのため、発生後の被害を少しでも抑えるには、「自助」だけでなく、「共助」も大切です。普段から地域の人と交流して家族状況などを把握し、自主防災組織を中心に地域での防災対策を進め、地域の防災力を高めておくことが求められます。

その中で、中心的な役割を果たすのが「防災士」です。皆さんは防災士という言葉を聞いたことがありますか。耳慣れない人も多いと思いますが、平成28年10月末現在、町内で防災士を取得している人は87人―。防災士は、講習などを受ければ誰もが取得できるものです。

次のページからは、地域の防災力向上の鍵となる防災士の役割やその活動について紹介します。



1、2_ 図上演習の様子。家族構成や家の構造など、さまざまなパターンを想定し、ハザードマップを使い避難や対応を検討。避難経路、近所の車いすのおばあちゃんは…。課題が付箋に書き出された　3_ 座学形式の講座の様子

Interview

講座を受講した
井口順子さん　宮本啓子さん　加藤高枝さん

自分の命に関わることですが、知らないことが多かったです。講座で学んだことは、地域で勉強会をするなどして、みんなが知っておくべきことだと感じました。今後は、日ごろからの備えを忘れず、地域の人と交流をしながら、いつどこで災害が起こったときにでも自助・共助で対応できるようにしておきたいです。

防災士の役割は―

防災士研修センター　代表取締役
甘中　繁雄さん

平常時の活動で被害を小さく　Interview

災害時だけでなく、被害を小さくするためには、平常時の活動が大切です。地域での防災活動は、誰かリーダーがいないと進みません。「防災に対する意識はあるけれど、どのように行動したらいいのか分からない」「災害が起こっても、自分たちは助かるから大丈夫だ」という人が多くいます。

防災士の皆さんには、災害に関する知識を増やして、どのような被害が出るか、その被害を小さくするためにどのような対策が必要かといった想像する力を養い、間違った知識を正して理解を深めていってほしい―。そして、地域のリーダーとなって地区防災計画を作り、実行・継続していくなどして、事前の防災対策を進めていってほしいと思います。

私たちも、防災士になる―。

防災士養成講座を知ろう

防災士になるには、次の3ステップを経る必要があります。
そのうち、会場での研修はどのようなものなのかについて紹介します。

11月5、6の両日、町単独での防災士養成講座を、文化センターで開催しました。この取り組みは、防災士を大幅に増やすことで、地域の防災力を高め、安全・安心なまちづくりを進めようと町が企画したものです。

講座には、町内の自主防災組織から47人が参加。「地震の仕組み」や「風水害と対策」といった災害に対する基礎知識を学ぶ講座をはじめ、「身近でできる防災対策」や「耐震診断と補強」など家庭や地域で生かせる講座などを受講しました。その他にも、講座には災害後の被害状況の想定や、避難所開設を図上で行う演習の時間もあり、被災後の緊迫した状況の中でも、冷静に迅速な対応がとれるように実践的な学習も行いました。

講座を受講することで、参加者の皆さんにはある意識の変化があったようです。

「地震などの災害に対する家庭の備えを見直したい」

「防災士だからというわけではなく、地域のみんなで災害時の対応など、防災について事前に話し合う必要があると感じました」

講座を通じて、日ごろの自分たちの生活を振り返り、家庭や地域での防災面における課題などが見えてきています。

「日本の災害対応の原則は、自分の命は自分で守るという『自助』です」と話すのは、防災士研修センターの代表取締役の甘中繁雄さんです。「家の中などに閉じ込められた1人を助けようとしたとき、10人もの人が必要と言われています。自分への支援が不必要となれば、合わせて11人が他の人を救う『共助』のための行動をとることができます」と話します。

このように、防災士養成講座は、特別な知識や高度な技術を学ぶものではありません。個人個人が来るべき災害に備えておくために必要な知識や技術を学び、それらを家庭や地域などで生かそうとするものだと言えます。

今回の講座には、多くの女性が参加しました。防災士の取得に性別や年齢の要件はありません。現在も、全国では小学生から80代までの男女が防災士として活動しています。町内でも、全国ほど幅広い年代ではありませんが、男女の防災士が地域などで活動しています。

次は、実際に防災士がどのような活動をしているのか、のぞいてみましょう。

防災士になるまでの3ステップ

①自宅学習・救命救急講習
※ 自宅学習は、所定のテキストの問題に答えていく。
※ 救命救急講習は②の後でも可。

②会場研修・資格取得試験（2日間）

③認証登録申請
※ ①②に係る確認書類を提出。

地域で活躍する「防災士」

皆さんは、黄色いベストとヘルメットをかぶった防災士を見たことがありますか。訓練のときはもちろん、さまざまな場面で防災士の皆さんは活動しています。西高柳地区の防災士の皆さんの活動の様子を見てみましょう。

1_防災訓練で指導する　2_文化祭。「炊き出し訓練を兼ねて豚汁を作りました」　3_非常持ち出し袋に必要なものをみんなで考える　4_運動会。「バケツリレーで楽しく防災について考えよう」　5_地域巡回。危険箇所はないか確認する　6、7_文化祭で防災グッズや活動風景の展示を行う　8_避難所設営の方法を学ぶ

現在、西高柳地区の防災士は5人で、そのうち3人が女性です。さらに、前のページで紹介した防災士養成講座に、2人の女性が参加しています。

全国にいる防災士の9割が男性という中で、女性の割合が多い同地区。「阪神淡路大震災で、災害時の対応に女性の視点がなく、苦労したという話を聞きました。だから、西高柳地区では、女性の視点を含めた防災対策を進めるために、防災士も女性が多いんです」と話すのは、防災士の藤岡緑さんです。災害が起こったとき、必要な物資や支援は人それぞれです。企画から男性も女性も関わることで、より防災に強い地区を目指しています。

同地区では、平常時の活動も活発です。地区の防災訓練をはじめ、組長を対象とした防災講座、防災委員と一緒に地区の危険箇所を確認する地域巡回、同様に消防団と夜間に行う年末地域巡回など、防災力向上のための活動や啓発を行っています。また、防災関連の行事だけでなく、地区の運動会で防災グッズを使った借り物競走やバケツリレーの競技を取り入れたり、文化祭では展示コーナーや炊き出し訓練を行ったりするなど、より多くの人に防災について考えてもらうような工夫をしています。

「避難の方法や避難所でのトイレの問題など、地域でどのように対応したらよいか、防災に対する考え方が変わりました。自分たちが行わないといけないという意識を持って活動しています」

防災士として活動することで、意識が変わったと話す石橋崇平さん。町内で女性初の防災士として活動している烏谷眞理子さんも、「地区の人の顔と名前を覚えようとするようになり、声を掛ける機会も増えました」と話します。

防災士だけではありません。同地区に住む大西愛子さんも、「家具に金具を取り付けたり、非常持ち出し袋を準備したり、どこを通って避難するか考えたり―。教えてもらったことを家で実践しています」と意識の変化を話します。

このように、防災士の皆さんはさまざまな場面で活動しています。そして、防災士の皆さんの活動は、本人だけでなく、地区の人の意識や行動を変えるきっかけにもなっています。

皆さんは、地区の活動に参加していますか。防災のための備えをしていますか。地区の一人一人が防災に対する意識を高め、地区での行動に移すことは、地区の、そして松前町の地域全体の防災力を高めることにつながります。防災士を目指すのも一つの手段です。この機会に、家庭の、地域の防災について見直して、行動に移していきましょう。

特集「我ら、地域を守る防災士。」　終わり

※本年度の県や町主催の防災士養成講座は終了しました。来年度、県で行う講座が決まり次第、区長を通じてお知らせします。

◉西高柳自主防災組織

来年で結成10年目を迎える。下の写真は、11月6日に行われた文化祭で行った炊き出し訓練の一コマ。豚汁作りと猫袋を使った炊飯を行った。左の大西さんは防災士ではないが、お手伝いで参加。地域住民一体となって活動に取り組んでいる。

（写真左から）
大西愛子さん
藤岡緑さん
石橋崇平さん
烏谷眞理子さん

他に防災士として、有光大岳さん、戒能教子さんがいます。